

## 谷川俊太郎の詩に関する研究 — 言語的特徴を中心に —

篠原 朱里

戦時中の翼賛詩への反省から、戦後詩の台頭として荒地派と列島派が現れた。彼らは自らの詩において現実を批判的に捉え、歴史や現実を主題に詩を書いた。しかし、この戦後詩は朝鮮戦争後、行き詰まりを見せ始める。大衆社会の出現により、詩が現実との関わりを見失ってしまったことがその理由として指摘されている。そのような中で現れたのが、谷川俊太郎も含めた第三期の詩人たちであった。彼らは、戦時中や戦後体験から言葉を引き剥がし、歴史や現実ではなく、自らの感受性によって詩を書くことを旨とした。

谷川俊太郎は 1931 年 12 月 15 日に、宮沢賢治の研究で知られた哲学者の谷川徹三と母多喜子の間に東京で生まれ、定時制高校を卒業している。その後、1957 年に最初の結婚をし、以降 3 回にわたる結婚と離婚を繰り返し、現在までに 1 男 1 女をもうけている。詩人としては、詩集『二十億光年の孤独』（創元社、1952 年）を上梓して以来、2016 年末までに約 125 冊の詩集を出している。詩作以外にも、エッセイの執筆や絵本の執筆、および翻訳活動、テレビ番組や舞台劇の脚本執筆、歌詞の作成など、幅広い分野で活動を展開している。

先行研究には、佐藤洋一（1997、1999）、大野麻実（2009）、和田勉（2013）の研究が挙げられる。しかし、これらの研究は谷川俊太郎の詩の言語的な特徴を実証的に明らかにしたものではなく、主として詩の解釈に基づくものである。本研究では、谷川俊太郎の詩の言語的な特徴を明らかにしていくことを目的とする。

分析では、詩に使用された品詞（なかでも名詞）、延べ語や異なり語の数などに注目した。形態素解析では、統計分析フリーソフト「R」上で形態素解析システム MeCab を展開する RMeCab パッケージを用いた。言葉を分類する際には、国立国語研究所が編集した『分類語彙表』を用いた。また、分析対象とする詩集は、集英社と思潮社から刊行された新作の詩集（計 18 冊）とした。

分析結果から、谷川俊太郎の詩について、集英社と思潮社の両社刊行詩集に共通する特徴と、両社刊行詩集の間で相違する特徴とが明らかになった。

谷川俊太郎の詩集タイトルや作品名には<人間、心、芸術などに関係する抽象的な言葉>と<量、時間、言語などを表す具体的な言葉>とが組み合わせて使用される傾向がみられ、詩の本文の言葉には、<「詩」、「言葉」など詩に関係する言葉>や<身体を表現するもの等、人間に関係する言葉>が長期に渡って使用されてきたという特徴を示す結果となった。また、集英社と思潮社とが刊行するそれぞれの詩集の相違からは、集英社の詩集では身近なものを題材としており、思潮社の詩集では詩に関する題材が多いことが、言語的な特徴を踏まえて指摘され得る結果となった。

（指導教員 原 淳之）